

# 土居遺跡

2010年3月

高知県南国市教育委員会

## 序

南国市は物部川に育まれた肥沃な香長平野に抱かれ、「土佐のまほろば」といわれるよう古くから人が生活を営むのに大変適した場所でした。そのため、数多くの遺跡が所在します。代表的なものとして、約2万年前に遡る旧石器時代の奥谷南遺跡、弥生時代の拠点集落である田村遺跡群、小蓮古墳をはじめとする多くの後期古墳、紀貫之の土佐日記にも記される土佐国衙跡、中世守護代細川氏の居館である田村城跡、土佐を平定し、四国制覇に夢を馳せた長宗我部氏の居城である岡豊城跡などをあげることができます。

なかでも岡豊城跡は平成20年7月に、比江廃寺跡、土佐国分寺跡に続いて本市で3件目の国史跡として指定されました。この指定を契機に、岡豊城跡と長宗我部氏はあらためて注目されることとなり、地元の方々による岡豊城跡を中心とした史跡めぐりなどの活動が活発になってきました。また、近年の歴史ブームで長宗我部氏が全国から注目され、ゆかりの地として訪れる人も増えてきています。

私たちが自分たちの住む地域の歴史や文化を知り、誇ることは地域に愛着を持つことにつながります。さらに次の世代を担う子どもたちにもこうした気持ちを育んでもらいたいと思います。そのためにも、地域の歴史を物語る遺跡の存在と内容を多くの方に知ってもらい、後世に伝えていく努力をしていかなければなりません。

本書は平成17年度に行われた土居遺跡発掘調査の成果をまとめたものです。今後広く利用され、文化財保護及び学術研究の一助になれば幸いです。

調査にあたりご指導を賜りました高知県教育委員会、財高知県文化財団埋蔵文化財センター、また、発掘調査への深いご理解とご協力をいただいた地域の方々、そして発掘・整理作業にご尽力いただいた作業員の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

南国市教育委員会

教育長 大野 吉彦

## 例　　言

1. 本書は、平成17年度に国宝重要文化財保存整備費補助金を受け、南国市教育委員会が市内遺跡発掘調査等事業として実施した土居遺跡発掘調査（南国市内重要遺跡確認調査）の報告書である。
2. 土居遺跡は、高知県南国市岡豊町笠ノ川に所在する。
3. 調査期間は以下のとおりである。  
試掘確認調査：平成17年8月22日  
発掘調査：平成17年8月23日～平成17年8月29日
4. 発掘調査は、南国市教育委員会が主体となり、高知県教育委員会・財高知県文化財団埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。調査体制は以下のとおりである。  
調査員　山所千佳（南国市教育委員会　生涯学習課　文化財スポーツ係　主事）  
総務担当　山淵博之（南国市教育委員会　社会教育課　文化財スポーツ係長）
5. 本書の執筆・編集は平成20～21年度に坂本裕一（南国市教育委員会　生涯学習課　文化スポーツ係指導主事）が行った。
6. 造構については、掘立柱建物（SB）、土坑（SK）、柱穴（P）で表示した。  
本書の標高は海拔高であり、方位は磁北を用いた。
7. 現場作業においては、高知県教育委員会文化財課、財高知県文化財団埋蔵文化財センター緒氏のご指導・ご教授を得た。整理作業においては、財高知県文化財団埋蔵文化財センター久家芳隆氏の指導を得た。記して深く謝意を表したい。
8. 発掘調査にあたっては、地元住民の方々のご理解・ご協力を得た。また、以下の現場作業員、整理作業員の皆様のご協力を得た。記して深く謝意を表したい。  
(敬称略)  
〔現場作業員〕吉川勉、窪田泰詔、西川初男、橋田芳雄  
〔重機オペレーター〕門田佳久  
〔整理作業員〕山中美代子、土居初子、櫻尾洋子、高橋山香
9. 当遺跡出土遺物は南国市教育委員会が保管している。遺跡の略号は05-DIである。

## 本文目次

第Ⅰ章 調査にいたる経過と調査の方法	
1. 調査の契機	1
2. 調査の方法	1
第Ⅱ章 周辺の地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の成果	
1. 概要	6
2. 調査成果	7
第Ⅳ章 総括	
1. まとめ	11
2. 長宗我部地検帳に見る笠ノ川地区	11

## 挿図目次

図1 南国市位置図	1
図2 土居遺跡の位置と周辺の遺跡	5
図3 調査地点位置図	6
図4 調査区位置図	7
図5 遺構配置図	8
図6 SK3セクション図	9
図7 出土遺物実測図	10
図8 笠ノ川地区小字図	12

## 表目次

表1 遺物観察表	9
----------	---

## 写真図版目次

写真1 調査前全景（南より）・TP1遺構検出状況（南より）・SK1出土状況	
写真2 SK2出土状況（南より）・SK3セクション（南より）・SK3完掘状況（南より）	
写真3 SK4完掘状況（東より）・完掘状況（東より）・完掘状況（北より）	
写真4 調査区北端セクション堆積状況（西より）・TP2完掘状況（西より）・TP2セクション（西より）	
写真5 出土遺物（1）	
写真6 出土遺物（2）	

# I 調査に至る経過と調査の方法

## 1 調査の契機

土居遺跡は、南国市岡豊町笠ノ川東村字両城土居に所在する。遺跡の種別は城館跡で、これまでには分布調査で土師質土器や古備前焼が表採されている。また、隣接して中世の城館跡である両城城跡も所在し、中世の遺構が存在する可能性の高い地域である。

今回、個人住宅建築工事に伴い、遺構遺物の有無を確認するために事前の試掘確認調査を実施した。その結果、良好に残存する遺構遺物が確認されたため、事業者と遺跡の取り扱いについて協議を行い、立地条件から盛土や設計変更による遺構の保護が不可能であり、遺跡の破壊が避けられないため、本発掘調査を実施することとなった。

## 2. 調査の方法

試掘確認調査は、調査対象地の上段にTR1、下段にTR 2を設定した。TR 2では遺構、遺物ともに確認できなかったため、本発掘調査はTR1を拡張し、遺構を検出した部分について記録保存を行った。測量については、周辺に基準点が存在しなかったため、調査区内に任意に設定した基準点で行い、方位は磁北を用いた。



図1 南国市位置図

## 第II章 周辺の地理的・歴史的環境

### 1. 地理的環境

土居遺跡の所在する南国市は、北緯33度34分、東経133度38分に位置し、東西約12km、南北約23km、面積125.35km<sup>2</sup>を測る。東西に長い弓状の海岸線を有する高知県のはば中央部にあたり、高知市の東隣、人口は約5万人を有する。主な産業は農業であり、かつては米の二期作の中心地であった。国の減反政策もあり二期作は行われなくなったが、7月の中旬には刈り入れを始める早場米の産地として知られている。海岸部では施設園芸が盛んなほか、十市のヤマモモ、白木谷の四方竹などの特産品も有名である。近年、高知空港の拡張、高速道路の延伸、阿佐線の整備、高知新港の開港など高知県の物流拠点都市としての役割のほか、高知市のベッドタウンとしても発展してきている。

市域の北半分は四国山地より連なる山地で占められる。その大部分は古生代ベルム紀の上八川層と白木谷層によって形成される。市域の北境界線付近では、上八川層の標高は約800mに達するが、南下するに従って次第に高度を下げ、白木谷層では標高300~400mとなり、やがて標高150m前後の丘陵となって、ついには平野に没してゆく。土居遺跡はこの山麓と平野部が接する場所に位置する。

市域の南半分を占める平野部は、物部川や国分川・舟入川の堆積作用により形成された扇状地であるが、高知平野の東部を占め、長岡郡と香美郡にまたがることから香長平野とも呼ばれている。香長平野は、舟入川を境に北側を古期扇状地、南側を新期扇状地に二分できる。古期扇状地は洪積世の最終氷期に形成された裸屑堆積物でおおわれており、長岡台地と呼ばれている。土佐国衙跡や土佐国分寺跡、比江廃寺跡などは長岡台地上に立地している。一方、新期扇状地は物部川の堆積作用による沖積平野であり、香長平野の大部分を占める。ここでは自然堤防がよく発達し、その上には南四国における弥生時代の拠点的集落である田村遺跡群をはじめ、弥生時代の集落跡が多数分布している。

### 2. 歴史的環境

南国市は洪積平野と沖積平野を有し、古くから人々の生活に適した地であった。その営みの痕跡である遺跡の数は300余りにのぼる。これは高知県の遺跡総数の約1割を占め、県下で最も遺跡の分布が集中する地域である。平野部を中心に旧石器時代以降の各時代の遺跡の存在が知られており中世までは土佐の政治経済の中心地であった。以下にそれぞれの時代について概観する。

旧石器時代の遺跡は、平成6~8年に四国横断自動車道の建設に伴う発掘調査が行われた奥谷南遺跡（南国市岡豊町）において、細石刃、細石核、ナイフ形石器などが層的に多数出土し、南国市でも旧石器時代の遺跡の存在が明らかになった。

縄文時代の遺跡は、県西部の四万十川流域に比べて少なく、数ヶ所が確認されているにすぎない。奥谷南遺跡では草創期～中期の土器、中期末の堅果類の貯蔵穴が出土し、奥谷南遺跡の南麓である栄工田遺跡（南国市岡豊町）からは、後期初頭～晩期終末の土器と共に磨製石斧が出土した。これらの遺跡は、丘陵部が平野部に接する地に立地しており、狩猟・採集に適した地域である。また、平野の南部では田村遺跡群（南国市田村）の第1期調査（1980~1983年）で後期の彦崎K1式土器、第2期調査（1997~2000年）で鐘崎式土器が出土し、九州との関連が窺えるが、集落跡は発見されていない。

弥生時代になると、遺跡数とその規模は急激に発展する。稲作に適した広大な沖積平野を有することから、平野部のほぼ全域に遺跡が展開している。なかでも田村遺跡群は、その規模において群を抜いており、高知平野における拠点的母村集落と考えられる。第1期調査では前期初頭の集落跡と小区画水田跡、中期末から後期前半の集落跡が出土し、検出された竪穴住居跡は60棟、掘立柱建物跡も14棟にのぼる。第2期調査では前期の環濠集落と前期末～中期前半の集落、中期後半～後期中葉の集落が移動を伴って変遷している様子が確認された。検出された竪穴住居跡は453棟、掘立柱建物跡は198棟にのぼる。田村遺跡群周辺の地域や中小河川流域では、前期後半～本葉にかけて小規模ながら大築小学校校庭遺跡（南国市大築）、采工田遺跡、岩村遺跡（南国市福船）などの遺跡が散見されるようになる。中期になると遺跡数は一転して激減し、特に中期前半の遺構は高知平野ではほとんど見られなくなり、田村遺跡群で上坑や竪穴住居が少数確認されているのみである。中期後半～後期中葉にはピークを迎えた田村遺跡群が衰退する一方、周辺部にあたる東崎遺跡（南国市東崎）、岩村遺跡、小籠遺跡（南国市岡豊町）などの中小集落が後期中葉から終末にかけて成立し、高知平野一帯に爆發的に展開していく。

古墳時代の古墳は、平成6年の四国横断自動車道に伴う長畠古墳群（南国市岡豊町）の調査で、同一丘陵上から4世紀前半・5世紀後半・6世紀前半の前期古墳（長畠2～4号墳）が確認された。後期古墳は、南国市岡豊町・久礼田・植田の平野と接する丘陵部が高知県最大の密集地である。なかでも小蓮古墳は県下最大の横穴式石室をもつ円墳であり、香長平野北部を中心とする有力豪族の墳墓と考えられる。22基の古墳からなる県下最大の群集墳である舟岩古墳群もこの地域に築造されている。集落は、弥生時代後期終末から引き続き営まれる古墳時代初頭の集落が香長平野で数多く調査されている。古墳時代中期以降の調査例は少ないが、土佐国衙跡（南国市比江）ではこれまでの調査で42棟の竪穴住居跡が出土している。

古代の遺跡は、土佐国衙跡や国史跡である比江廃寺塔跡、土佐國分寺跡が所在しており、古代土佐の政治・文化の中心地であったことを示している。土佐国衙跡では、昭和54年から31次にわたる確認調査が行われ、官衙を構成すると考えられる掘立柱建物群などが検出されているが、政庁などの国衙中枢の遺構は確認できていない。土佐国衙跡の北方1kmに位置する白猪田遺跡（南国市久礼田）では地鎮祭祀の跡や縄文輪花皿が出土し、「国府集落」としての性格づけがなされている。比江廃寺塔跡（南国市比江）は白鳳時代の寺院跡であり、現存している塔心磚は原位置を保っていることが発掘調査により確認された。土佐國分寺跡（南国市四分）では現状変更に伴う調査および伽藍配置確認のための調査が行われ、礎石建物跡、掘立柱建物跡などが検出されている。

中世になると遺跡数も増加し、分布も平野部の城館跡や山麓部の山城跡などほぼ全域にわたる。現在確認されている南国市内の中世城館跡は47ヶ所にのぼる。長宗我部氏の居城であった岡農城跡は、一ノ段・二ノ段・三ノ段などから礎石建物跡が検出され、平成20年7月に国指定史跡となった。岩村土居城跡（南国市福船）では城を囲む2重の堀が発掘され、出土遺物から14～15世紀に機能していたと考えられる。田村城跡は守護代細川氏の居館と伝えられている。平成16～18年度に実施した確認調査で内堀の一部が確認され、内郭部の範囲が南北約130m、東西約120mであることが確認された。外濠については南西角部と南側のみが確認され、七輪質土器や護符が出土した。全体の規模やプランの確認が今後の課題となっている。高知空港拡張に伴う田村遺跡群発掘調査では、田村城跡の南側で環濠塹跡が31ヶ所検

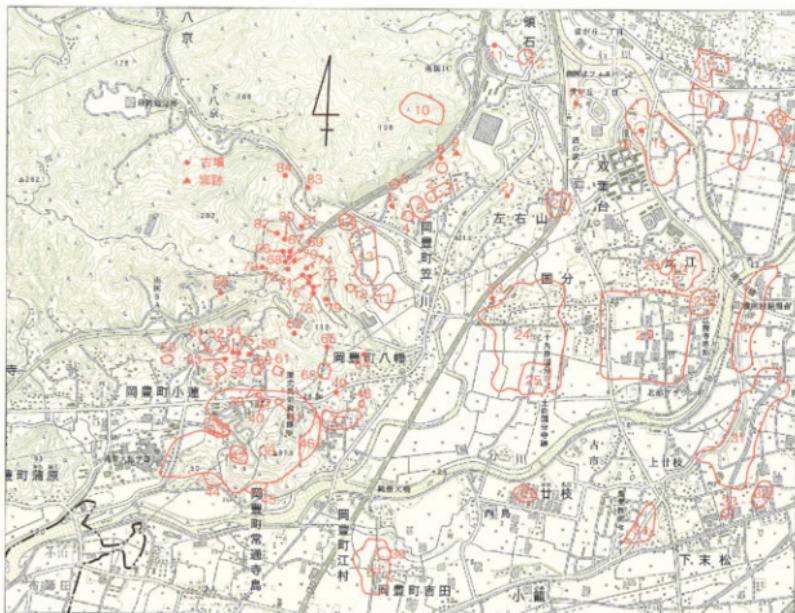
出されており、南北朝期に機能したもの、守護代細川氏の入部後に機能したもの、長宗我部氏の台頭期に機能したものとの3時期に区分することができる。

近世以降、山内氏の土佐入国による高知城築城以降、土佐の中心地は高知市域に移った。長岡台地は当時未墾の荒地であったが、藩政初期の野中兼山による新田開発の際、諸役・諸税御免として入植を奨励し、御免町が生まれた。今は後免と改められ、南国市の中心街となっている。

近年戦争遺跡を平和学習に積極的に活用していくこうという動きが全国的に見られているなか、障山遺跡では海軍の送信所跡地が発掘され、砲弾類が多数出土した。また南国市前浜には、旧高知海軍航空隊所属の飛行機の格納庫であった掩体7基が残存しており、前浜掩体群として平成18年2月に南国市史跡として指定をされた。

#### (参考文献)

- 『南国市史 上巻・下巻』 南国市教育委員会 1979年  
『奥谷南遺跡Ⅰ』 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1999年  
『柴工田遺跡』 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年  
『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』 高知県教育委員会 1986年  
『田村遺跡群Ⅱ』 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004年  
『岩村遺跡群Ⅳ』 南国市教育委員会 1999年  
『小籠遺跡Ⅲ』 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997年  
『長畠占墳群 高知自動車道(南国～伊野)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』  
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年  
『土佐国衙跡発掘調査報告書 第1～11集』 高知県教育委員会・南国市教育委員会 1980～1991年  
『白猪田遺跡』 南国市教育委員会 1997年  
『上佐国分寺跡 第1～3次発掘調査概報』 南国市教育委員会 1988～1991年  
『高知県南国市 中世城館跡』 南国市教育委員会 1985年  
『岩村遺跡群Ⅲ』 南国市教育委員会 1998年  
『岡豊城跡』 高知県教育委員会 1990年  
『陣山遺跡、陣山北三区遺跡』 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997年



No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	土居遺跡	22	五反田ヤコエ遺跡	43	下野上居城跡	64	藏本1号墳
2	両城城跡	23	国分大塚古墳	44	天神丸遺跡	65	藏本2号墳
3	池尻遺跡	24	国分寺遺跡群	45	桑名尼敷遺跡群	66	舟岩1号墳
4	池尻古城	25	土佐園分寺跡	46	西谷遺跡	67	舟岩2号墳
5	寺家古墳	26	乾家墓所	47	市場遺跡	68	舟岩3号墳
6	寺家遺跡	27	比江山城跡	48	谷泰山先榮の地	69	舟岩4号墳
7	長源道跡	28	比江庵寺跡	49	米内古墳	70	舟岩5号墳
8	長源古墳	29	上佐國府跡	50	岩原谷遺跡	71	舟岩6号墳
9	笠ノ川塚跡	30	湖ノ上遺跡	51	大岩遺跡	72	舟岩14号墳
10	新城城跡	31	三添遺跡	52	梅ノ木遺跡	73	舟岩17号墳
11	牛月古墳	32	八反地遺跡	53	小蓮古墳	74	舟岩7号墳
12	八反田遺跡	33	中星遺跡	54	小蓮2号墳	75	舟岩8号墳
13	帷原古墳	34	後藤丸遺跡	55	小連3号墳	76	舟岩9号墳
14	中ノ上居城跡	35	兼井上居城跡	56	小蓮4号墳	77	舟岩10号墳
15	上岡越遺跡	36	吉田土居城跡	57	石谷土居城跡	78	舟岩11号墳
16	鰐ノ骨1・2号墳	37	吉田遺跡	58	天神の前遺跡	79	舟岩12号墳
17	前嶋遺跡	38	岡豊城跡	59	天神の前古墳	80	舟岩13号墳
18	白堀田遺跡	39	長宗我部一族の墓	60	蓮如意寺遺跡	81	舟岩15号墳
19	津ノ土居遺跡	40	長宗我部一族の寺跡	61	谷土居遺跡	82	舟岩16号墳
20	泉ヶ内遺跡	41	香川五郎次郎親和の墓	62	狹間古墳	83	柳ヶ首古墳
21	左右山古墳	42	云瓶跡曲輪	63	藏本遺跡	84	鹿戸古墳

図2 土居遺跡の位置と周辺の遺跡

## 第III章 調査の成果

### 1. 概要

調査は平成17年10月4日～平成17年11月5日まで行った。試掘確認調査では、調査対象地の上段にTR1、下段にTR2を設定した。TR2では遺構遺物ともに確認できなかつたため、本発掘調査はTR1を拡張し、遺構を検出した部分について実施した。調査面積は114.63m<sup>2</sup>である。調査区の基本層序は耕作土の下に黒ボクに由来する黒色粘質土が堆積し、地山であるオリーブ黒色粘質土となる。遺構は地山面で獨立柱建物跡1棟、土坑4基、ピット55個を検出した。出土遺物は弥生土器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器類、鉄製品が出土した。



図3：調査地点位置図



図4：調査区位置図

## 2. 調査成果

### (1) 掘立柱建物跡

SB1

調査区東側で検出した。1間×2間、梁間約2.3~2.5m、桁行約3.1~3.2m、柱間距離は1.5~1.7mを測る。棟方向はN-30°-Eである。柱穴は直径18~28cm、深さ12~44cmを測り、P2から土師質土器の細片が1点出土したのみである。

### (2) 上坑

SK1

調査区内寄りで検出した。円形プランを呈し、直径1.7m、深さ約50cmを測る。北側のSK4と切り合うが、切り合い関係は不明である。調査担当者の記録によると、断面形状は逆台形であり埋土は3層に分層できレンズ状の堆積状況を示す。1層は黒褐色粘質土で土器片を多く含む。2層は黒褐色粘質土、3層は小礫が多く混じる黒褐色粘質土である。遺物は弥生土器片が出土し、2層上面に集中する。図示し得たのは6点（図7：1～6）である。（1）は甕である。1～3は壺である。1は頸部下端に櫛状原体による沈線を施し、その下に板状原体と薄く鋭利な原体による列点文を施す。磨耗が著しく調整は不明瞭である。2は頸部下端に板状原体による綾杉文が施される。磨耗が著しく調整は不明瞭である。3は

短く外反した口縁端部の下端にキザミ目を施す。4・5は先である。4は口縁部がくの字に外反し端部は上方内側に屈曲し、内外面共に横方向のナデ調整を施す。胴部外面はハケ調整ののち下胴部はヘラ削りを施す。内面はナデ調整で指頭圧痕が残る。底部は欠損するが口縁から下胴部の約1/2が残存する。5は胴部片で外面には煤が付着する。外面はハケ調整、内面はナデ調整を施す。接合できなかったが、同一固体の破片には斜格火捺が残るため、写真のみ示した（写真5-5）。6はほぼ完形の鉢である。口縁は緩やかに外反し端部は面をなす。外面には頸部まで縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整である。胴部は丁寧にヘラ削りが施される。内面は板状工具によるナデ調整が施される。

#### SK2

調査区南寄りで検出した。円形プランを呈し、直径63cm、深さ31cmを計る。埋土は2層で共に黒褐色粘質土であるが、上層のほうが若干明るめの色調である。埋土上層で台石1点と石斧（図7：7）1点が出土した。（7）は大型船石斧である。石材は緑色片岩製で刃部の一部は剥離欠損する。残存する刃部の稜は著しく偏っており、研ぎなおして使用していたことも考えられる。この他に埋土中から弥生土器片が数点出土したが、図示し得るものは無かった。すべて器壁が薄く胎土は細かい砂粒を含む。

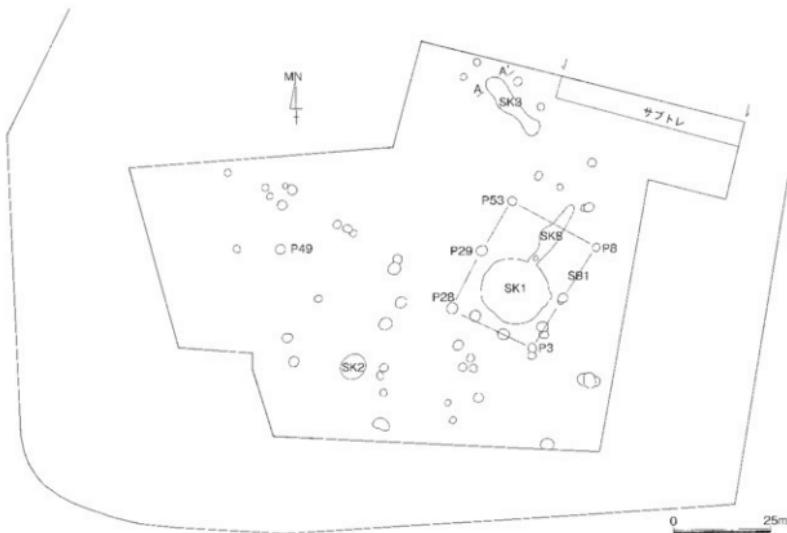


図5：造構配図

### SK3

調査区北部で検出した。不整形な溝状を呈し、長さ1.9m幅30~40cm深さ38cmを計る。長軸方向はN-40°-Wである。断面形状は逆かまぼこ型で、埋土の大半が炭化物で實際は炭化物の混じった焼土となる。断ち割りによる断面観察から底から壁面にかけて粘土を貼り付けていたと考えられ、何らかの火床としての利用が考えられる。遺物は出土しなかった。

### SK4

調査区東よりで検出した。南端部がSK1と切り合うが、切り合い関係は不明である。不整形な溝状プランを呈し、長さ約2m、幅約30cm、深さ4~12cmを計り、底は凹凸が著しい。長軸方向はN-33°-Eである。埋土は単一層で黒褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

#### (3) ピット

調査区全体で55個のピットを検出した。検出面での埋土は黒色と黒褐色に分けることができる。出土遺物は全体的に少ないが、P49から刀子茎(図7:8)が出土した。折損し全体に鉛に覆われているが、目釘穴と目釘の頭が確認できる。

その他には、P1・6・23・36から土師質土器、P44・46から瓦質土器が出土したが図示し得るもののは1点(図7:10)のみである。10はP36出土の土師質土器の杯である。磨耗が著しいが底部に回転系切痕、外面にロクロ目を残す。

#### (4) その他

表土中より底部に回転系切痕が残る土師質土器の小皿1点(図7:9)が出土した。

表1: 遺物観察表

出土遺物観察表(土器)

固版 番号	遺物 名	遺構	層	断面	法面(cm)			特徴	備考
					上径	替高	側径		
7 1	SK1	弥生	表		(17.4)			肩部に擦痕沈れ。その下に板状工具の施部により剥突を施す。	肩部片
7 2	SK1	弥生	表		(5.0)			板状工具による擦痕又は施す。	腹部片
7 3	SK1	弥生	裏	(26.0)	(1.6)			外反した口縁下端部にキサミを施す。	口縁部片
7 4	SK1	弥生	表	21	(24.9)	28.6		上縁部はくだけて外反した方に折彎する。 側面:内面:外縁:口縁から底部は後ツグ:側部はハケのち下端部へラブリ。 内面:ナダ:沿縁:底:ハケ:内面:ナダ。	口縁~側部約1/2残存 腹部片
7 5	SK1	弥生	表		(9.5)			全体に擦痕が残し、外面に火難が残る。 側面:外縁:口縁~側部は横方向のハケ。体部はヘラ削り。内面:口縁~側部は後方のハケ。体部は板状工具によるナダ。	腹部片
7 6	SK1	弥生	表	23.6	14.7		87	口縁部は横方向に外反し、側部は面をなす。 側面:外縁:口縁~側部は横方向のハケ。体部はヘラ削り。内面:口縁~側部は後方のハケ。体部は板状工具によるナダ。	ほぼ完形
7 9	表土 土器 土器	土器質 土器	小皿	7.4	1.2	5.6		底部に系切痕を残す。	完形
7 10	P36	土器質 土器	杯		(26)	5.8		体部にろくろ目を残す。	

出土遺物観察表(石器・鉄器)

固版 番号	遺物 名	遺構	層	法面(cm/°)			特徴	備考
				全長	全幅	重量		
7 7	SK2	石斧	13.9	7.0	4.0	645.0	大型船刃石斧。全面に研磨される。刃部一部欠損。緑色石片。	
7 8	P49	刀子茎	(6.6)	1.6	0.3		目釘穴と目釘の頭が1箇所残る。	

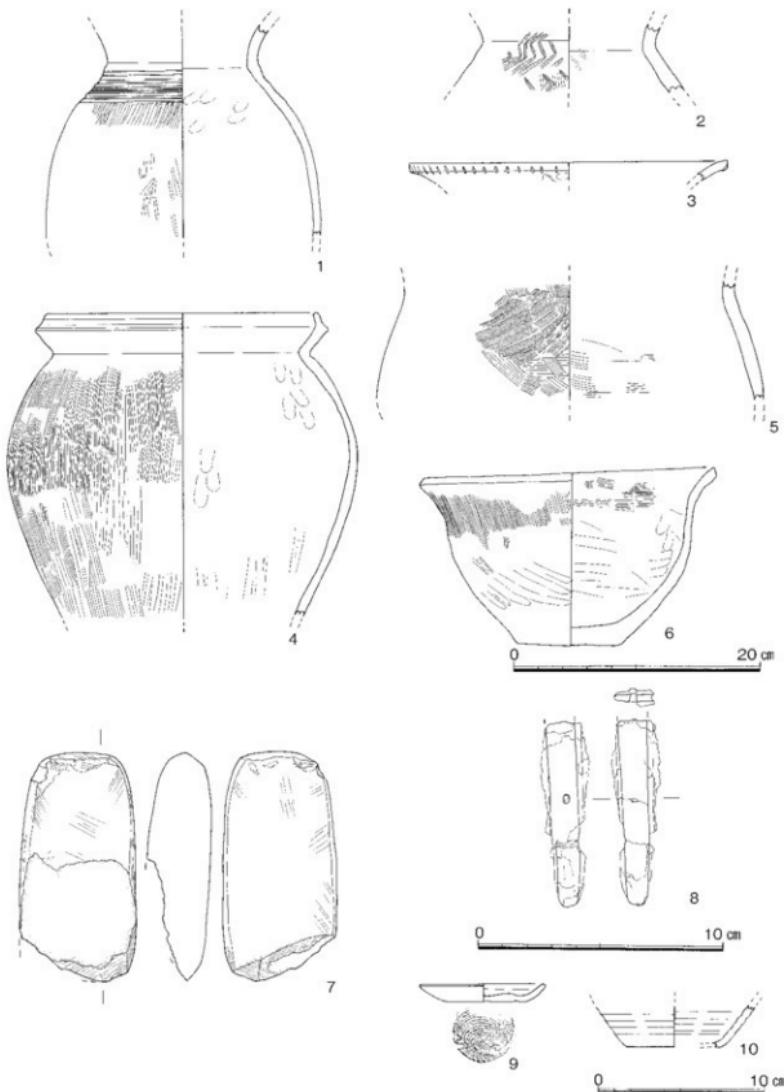


图7：出土遗物实测图

## 第IV章 総括

### 1.まとめ

今回の調査で確認された遺構のうち、弥生時代の遺構と考えられるのはSK1とSK2であるが、出土遺物が少なく、その性格について決しかねる。

その他の遺構ではSB1がSK1とSK4を覆う形で検出されているが、その関係は不明である。柱間距離が長いことから作業場等の簡便な覆屋と考えるのが妥当であろう。SK3は底から壁面が被熱により赤色化し埋土のはとんどが炭化物であることから、何らかの焼成施設であると考えられるが、時代や用途については出土遺物が皆無であり明確にできない。ピットから出土した遺物は瓦質土器片や土師質土器の細片であるが、P49からは刀子茎が出土した。今回の調査は調査範囲も狭く、出土遺物も少ないため詳細な時代は明らかにできないが、検出した遺構の大半は中世以降のものであると考えられる。

そこで遺跡周辺を見てみると、土居遺跡の周辺には中世の城館跡が点在する。土居遺跡の所在地のホノギも「古城」である。遺跡の西側に隣接した標高32m程の丘陵先端部に奥城（豊永土居）城跡が所在する。詰には一部壘状地形が残るが、後世の開墾を受け現在は栗林や畑地となっている。「長宗我部地検帳」の段階でも「堀タオシ」として堀が埋められ、すでに耕地化している部分もある。背後の山麓の山頂には「岡豊新城」がある。標高189mの細長い尾根上に詰、曲輪、堀切が連なり、詰や曲輪には壘状地形も残る。「土州郡史」には長宗我部氏の有力家臣と伝えられる豊永藤五郎の砦と記されている。南西200mには「池尻古城」がある。標高35m程の丘陵先端部に位置し、詰は現在、八幡宮となっている。南側の現参道部分を除いて詰は土壘に埋まれている。地検帳では古城となっており、宍崎源兵衛の給地である。笠の川側を挟んだ約800m西側、岡豊別宮八幡宮の北麓には「西村土居城跡」がある。土居と伝えられているが遺構は残存しない。地検帳では、元親の有力家臣と伝えられる西村源左衛門の給地となっている。

### 2.長宗我部地検帳に見る笠ノ川地区

地検帳に記載されている笠ノ川地区のホノギは、現在も小字として残っている。以下の「」は地検帳のホノギ、（）は現在の小字での標記である。同じ表記のものは省略した。地検帳に記載されている順に、「島ヤシキ」（島屋敷）、「山モト」（山本）、「西ノクホ又は西ノ窪」（西ノ久保）、「前タ」（前田）、「西村」、「ヒハラ」（比原）、「西ノ芝・西ノシハ」（西ノ芝）、「柳カクヒ」（柳ヶ首）、「寺家」（土家）、「古城」（兩城）、「長源」（長源山）、「ヒノクチ」（馴ノ口）、「池シリ」（池尻）、「川原田」、「ホソタ」（細田）、「アリハラ」（在原）である。このなかで、特に屋敷地を意味する「ヤシキ」の記述が多いのは、「島ヤシキ」「西村」「柳ガクヒ」「寺家」「古城」「池シリ」である。また、城に関するホノギは、「西村」に土居・的場・タカハ（鷹場）、「古城」に堀・二ノ堀・土居が見られる。

笠ノ川地区は現在も大農と土佐山から香長平野に出る道路の結節点にあたり、中世でも交通の要衝であったと考えられる。そこで、長宗我部氏は北方の敵に備えて笠ノ川地区に家臣を配したことが考えられる。今後、文献や発掘調査などで検証していきたいが、長宗我部氏関係の史料は少なく、屋敷地で

あった部分はほとんどが宅地となっており、確認調査を実施することは困難である。しかし、家屋の建て替えなどの際にはできる限り確認調査を実施することで資料を蓄積していきたい。

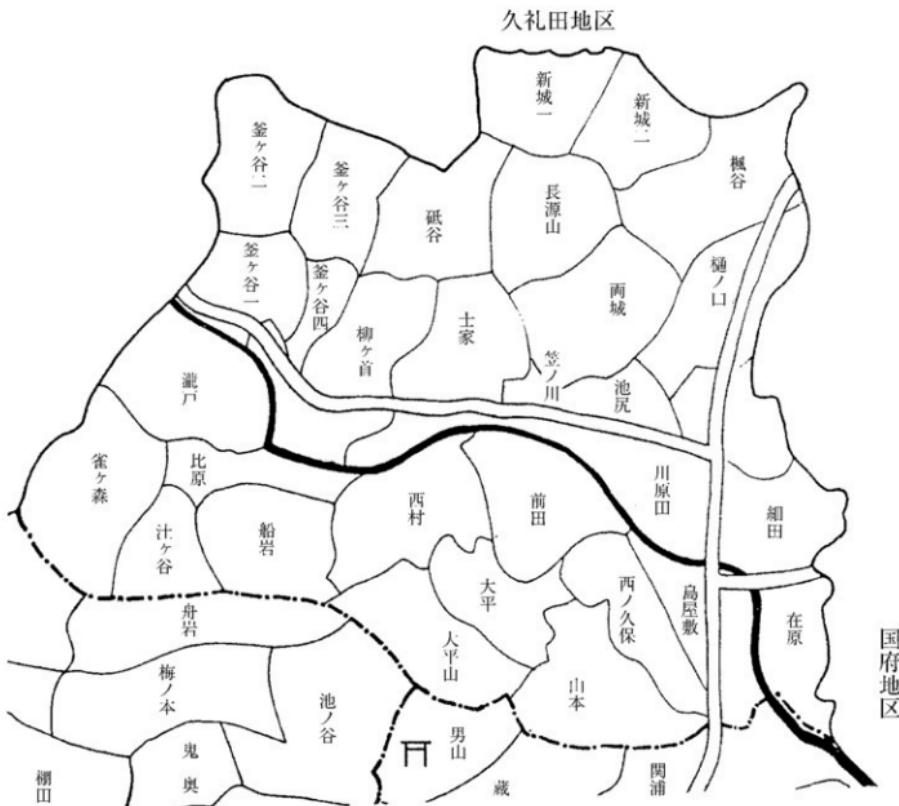


図8 笠ノ川地区小字図

# 写 真 図 版



調査前全景（南より）



TPI 遺構検出状況（南より）



SK1 出土状況

写真2



SK2 出土状況（南より）



SK3 セクション（南より）



SK3 完掘状況（南より）



SK4 完掘状況（東より）



完掘状況（東より）



完掘状況（北より）

写真 4



調査区北端セクション堆積状況（西より）



TP2 完掘状況（西より）



TP2 セクション（西より）



出土遺物（1）

写真 6



7



8



8



9



10

出土遺物（2）

## 報告書抄録

ふりがな	どいいせき							
書名	上居遺跡							
副書名	平成17年度個人住宅建築工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	南国市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第25集							
編著者名	坂本 裕一							
編集機関	南国市教育委員会							
所在地	〒783-0004 高知県南国市大塙甲2301 TEL 088-880-6569							
発行年月日	2010年3月							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ○分	調査期間	調査面積	調査原因	
土居遺跡	なんこくし 南国市 岡豊町 笠ノ川	39204	040035	33°	133°	2006.8.22～ 2006.8.25	125.6m <sup>2</sup>	個人住宅 建築工事
				36'	38'			
				33°	01"			
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
土居遺跡	城館跡	中世	掘立柱建物跡 焼成土坑	弥生土器 大型蛤刃石斧 土師質土器 刀子茎				
要約	上居遺跡は、分布調査で土師質土器や古備前焼が表採されている。遺跡の西側に両城跡が隣接することから中世城館に関係する屋敷地の可能性が高い。また、長宗我部氏の居城である岡豊城跡の北東に位置し、遺跡周辺には他にも中世の城館跡が点在する。四国山地から香長平野に至る交通路に位置することから北方の敵に備える要衝であったと考えられる。							

## 土居遺跡

(南国市埋蔵文化財発掘調査報告書 第25集)

2010年3月

発行 高知県南国市教育委員会  
高知県南国市大塙甲2301  
電話 (088) 880-6569

印刷 川北印刷株式会社

